

しかし、子供達が二人とも学校を卒業し、それぞれ就職をし、収入を得て、やっと生活も楽になりました。子供は親に似ず学校の成績も良く、上の学校に入学したい希望もあり、勉強もしましたが、学費も出すことが出来ないのです、職につき、進学を断念させました。子供達も、戦争犠牲者の一人といえましょう。申しわけないと今でも思っております。

夫はなにをやっても駄目で、又もヤケになり、酒を飲み、金をセビリ、暴力をふるって家族を困らせていましたが、不摂生がたたり、昭和四十一年四月脳疾患で死亡しました。

私の人生の前半はなんだったんだろうか、親のいいつけで結婚し、働きづめでなんのしあわせもなかったと思います。またたく間に、年をとり、九十路の坂道のをぼりつめ、いっお迎えが来てもよい年になりました。しかし二人の子供も六十歳をこえ、現在では孫や曾孫が正月やお盆に集まり、ワイワイ楽しく、さわいであるのを見るのが一番の楽しみです。米寿の祝を夫一人が欠けましたが、全員二十数人が温泉一泊で

やってもらい、今年は卒寿の祝をしってくれるそうで、みんなで老いた私を大切にしてくれ、たいへん幸福な毎日を送っています。

今、過ぎし日々を思うとき、感無量のものがあります。敗戦国民の悲哀は、全世界人類に味あわせてはなりません。それには、世界から戦争をなくすことです。

わが子に書きのこす

東京都 浅野さだ

夫は学生時代に専攻した火力発電の満州電業に就職し、大連に住む。私は縁あつて嫁ぎ当時二十三歳で昭和八年の春、はるばる大連に行きました。

翌年一月、長男晃一が生れ、私たちは旅順や金州と日清・日露の戦跡を訪ねて犠牲者の冥福を祈った。よくも当時の日本が大国に勝つたものだ、兵隊さんご苦労さまでした、と涙を流した、しかしその時、またまた、昭和六年に満州事変が起きていたのである。

夫の勤務先は中国の国都たる北京の中南海公園の中にある市公署の中の電灯会社の火力発電関係で、その指導者として客分の待遇があたえられた。

私達に留民は国際間に何事があったのか一向無關心、ただ領事館からの連絡に従うというありさまである。

こんな或る日、狭い歩道に立ち並ぶ露店の前を酔っぱらった日本兵が一人ヨロヨロと歩いてた途端、ピナッツ売りの屋台がパーンと音を立ててひっくり返った。豆が四方に飛び散った。日本兵が屋台を足で蹴とばした。

これと前後していろいろな指令が警察からおりてくるようになった。

国債の強制購入を、きっかけに居留民の日常生活についての注意事項、つまり中国人に対しての言語、動作、服装への干渉など。

昭和十六年、第二次世界大戦はじまる。それなのに北京の日本人はまだまだ天下泰平。中国民衆を軽蔑してはばからぬさまである。

昭和十八年の秋も半ば頃、夫の勤務状態にも変化が見られるようになる。それまでの朝夕の車での送迎から電車通勤となり、服装もカーキ色の国民服にゲートル、戦闘帽という戦時体制に移っていた、子供達の登校は先生付添いの集団登校となり、帰宅して顔をみるまで気懸りということである。

このような中で、夫は軍の命令で奥地に出張して、いつ帰るとも連絡がないまま不安な日をおくるようになった。

いよいよ軍も敗戦を認めざるを得なくなり、終戦の詔勅を聞いた居留民の動揺は言語に絶した。そして間もなく引き揚げが開始された。

夫は中国の要請で技術者として残留ときまったが、以前から、夫は大陸に骨を埋める決意であったので残留のついでに子供もこの地で育てたいということでも頑張った。しかし子供達の学校のこと、食糧の購入、私たち女性群は食糧の補給にほとんどの時間を費やす、単独行動はせずに必ず四、五人で遠くの野天市場まで買い出しに出かける。米価は朝と晩で値段が変わる。

沢山持てないから少しづつ求めるので二、三日おきに
通わなければならぬ、それも一般民衆よりは高く買
わされるし、どこからともなく石のつぶてが飛んでく
る。罵声が追いかけてくる。

一方、夫の勤務も思った程のこともなく、前途に希
望がもてなくなつたので、急に帰心矢の如し、とみな
引き揚げの方向に思いを同じくした。

ここで記録にのこしておきたいことの一つに次のよ
うな事件があつた。領事館関係の役人の家族と、某銀
行の家族の方々が、軍部からの指令であつたのか、早
い時期に一万円をまとめて日本に送金していたこと
も、敗戦後それとなく知らせてくれた。その頃、私達
の貯金は封鎖され、一か月四百円づつ三回内地に送金
しただけで終りというのに比べれば、月とスッポンの
ちがいでないか、夫はさすがに慌てて、子供の小遣ま
でかき集め、一万円を日本に送つたが途中で凍結され
たものか、帰国してみていることを知つた。
多分あの頃の一万円は現在の一千万円ぐらいにあたる
のではないだろうか。

私達の引揚げは方々と折衝した結果、天津港から最
後の引揚船と決定した。昭和二十一年三月下旬であつ
た。天津港まで無蓋貨車に貨物と一緒に詰めこまれた
敗戦国民のざまである。全員立つたきり、私は片足で
立ちん坊のまま運ばれていった。しばらくすると長男
と次男が代わるがわる、小便が、と合図してくる、男
の子は他の人にたのんで貨車から降して用をたすのに
成功してホットした、次は娘の番である。これには泣
きたいほど困り、我慢させるだけさせているうち、誰
やらが、床に穴がある、と教えてくれ、他人さまにお
願いしてやつと目的を果たすことができた。

機関車の上だけに屋根があつて、その上に銃を手に
した中国兵が立つて四方を監視している中で手段で
あつたから緊張も極限であつた。

やがて列車が闇に吸いこまれるようにノロノロと停
車した。野っ原である。このままで夜を明かすが、若
し暴民に襲撃されたら命のかわりに、めいめい金めの
品か金銭を出すように、との伝達に一同ふるえ上がっ
てしまう。夜も更けたころ予想どおり暴民がやってき

て、世話人と交渉した結果、夫は腕時計をさし出して難を逃れた。これは計画的だったかもしれない。

天津港に着いたときはさすがに疲れて、その緊張は限度にきていた。港までの泥沼道は一足一足ぬき足さし足の歩みであった。

船は、軍のLSTという上陸用舟艇で、くじ引きで坐る場所を決めた。

三日ほど経ってチフス患者が出たということで消毒や検査で船内に三日間閉じこめられた。そのうち聞けば上陸予定地は山口県仙崎とのこと。つい眼の前で停船していることを知り無性に涙が流れた。

上陸と同時に一人につき千円と幾枚かの食券が渡された。とに角引き揚げ列車で上野までたどりつくことが出来た。

その時、上野で偶然にも親類のものに会った、聞けば職探しに上京したとのこと。奇遇に驚きながら、故郷の母の安否を聞く。私は父の死にも戻らずじまい、彼はモソモソと母が老衰で二か月前あの世へと。母を頼りに引き揚げてきたのに、万事窮す。ただ泣くしか

なかった。

ただ、故郷に帰れば何とかなる、というだけが自分の本心であった。

翌朝、なつかしい米沢の駅に、義父の出迎えをうけて降り立つ、働きの長男の夫の帰国は嬉しかったらしい。

やがて家に着いたが、いる筈の姑がでてこない。私は何気なく、只今、と声をかけた。その時がたくと音がして、うす暗い部屋から手に箸をもった姑がニコリともせず、おかえり、と迎えてくれた途端に、今までの夢はあとかたもなく消え去ってしまった。私たちは、招かれざる五人であったのだ。しまった、と後悔してもあとの祭り。

冷害地の貧しい農家、雪どけの季節で何の収穫もないときなのだ、私ははじめて骨肉の絆の崩壊を知った。芋と米の半々のごはんは、夫、弟、長男の三つの弁当に詰め、残りはおじやとしてうすめて食べる、長男は六キロの雪路を中学に通う、自分が哀れになってポタポタと茶碗に涙が落ちる、肺浸潤を病む長女絢子は

部落の分校に通っているが、何としても医者に診察してもらいたかった。市内に住めば、引揚者は無料で診てもらえるときけば、矢も楯もなくなる。いよいよ私ども親子はとにかくここを出ることに、ここを固めた。丁度そのころ、市の引揚者住宅として戦前の建物を改造する情報を耳にしたので、市に日参の末、管理人という名目で入居の許可をえた、天にものはる心地とはこのこと。この強行手段は娘の健康のためという大義名分が立った。すぐ無料診療の手続きをすます。ホッとした。

二、三年前、よくお母さん、かつては一本八十円もの注射をさせてくれたわね、と娘にいわれて、忘れていたことを思い出した。

煮たきする薪がされると次男は学校の帰途木のはしっこを方々から拾ってきて私を助けてくれた。

長男は寮の共同畑に下肥かけにつとめてくれた。

今度は、夫が北海道電力会社に就職し、ようやく人並の生活をおくれる目安がたった。

わずか三年足らずの間でしたがめまぐるしい人生の

縮図とでも言おうか、私たち五人が一本の糸に結ばれて、この苦しみを克服してきたことを、ただでは済まされない、この気持ちを、わが子にこの手紙を残したいと思う。

上海から引揚げまで

群馬県 乾

キチ

昭和十七年十二月、生まれて初めて見る異国、上海に着き、主人を迎えられ、杭州という町で、新しい生活が始まりました。主人は半官半民経営の華中運輸に勤務しておりました。半年ほど平和に暮らすうちに、転勤で昭孔という町に今でいう単身赴任となりました。当時としては、その町は非常に治安が悪く、婦女子は危険で、居住不能な所でした。異国での別居生活はたいへん淋しい暮らしでした。

杭州では女子徴用工として、自動車の部品等の荷造り運搬の作業でした。そんな生活の中で妊娠したので、